

-1965 March-

# LEBEN

第 7 号

鹿児島大学生物研究会

# 目 次

○ 生物のいのち .....	山 根 銀五郎 .....	1
○ オオオサムシの地方変異 ( I ) .....	船本秀夫・大我俊輔 .....	3
○ 屋久島からの甲虫類の採集記録 .....	嶋 洪 .....	6
○ 屋久島の甲虫採集報告 .....	河 野 謙 一 .....	9
○ タテハモドキ目撃記録 .....	田 中 章 .....	15
○ 屋久島採集標本箱 .....	永吉正義・中田一章・上宮健吉 .....	16
○ 佐多1963年秋の蝶 .....	田 中 章 .....	20
○ セセリチヨウ科のPumpingの記録 .....	田 中 洋 .....	24
○ 与論島採集植物目録予報 .....	池 田 豪 憲 .....	26
○ 編 集 後 記 .....		32

# 生物のいのち

山根 銀五郎

夏休みが近づくころになると草木はおい繁げり虫は数が増して、自然には生命があふれるように成る。長い雨もあけて真夏の空の下に植物を求め、虫をさがし、海辺に小動物をあつめるのは大きなよろこびだ。

そうしてとつたものは多くは標本となつて採集家の宝物をふやして行く、今年も大供、子供が虫を追い草を求めて山野を跋歩することだろう。

以前は町の中でも飛びかうていたトンボやチョウもめつきり減らし、野草らしい野草も影をひそめてしまつて淋しいことである。都市の膨張ということだけでなく、農薬の大量使用がどんなにか自然界を害つているか。

私たちは工夫に工夫をこらして自分たちの生存を確保し生活を富ませようとがんばるが、その結果は自然にまかせておけば丈夫だつた子供はヒ弱になり、大人も手足を動かすのが面倒になつて機械を使い結果は満足に歩くことさえできず、心臓は弱り、肝臓はむしばまれ、排気ガスのためにガンが続発して処置なしである、精神病の増加もこの人間の活動やその結果である社会的なものが生み出したことであろう。

豊かな山野をこわし、多彩な生物を絶滅して、いたずらにマイカーを走らせてみたところで、人生は豊かにはなるまい、団地の小部屋に餌をあてがわれた飼育動物のようである。

こうなると生きることの目的と云うか、意味がもう一度反省させられる。雑草だ、毒虫だとさわいでいるときには、それが絶滅に熱心だつたが、全力をあげた結果は虫もいず、草らしい草もない、そして川の魚も、海の魚も死にたえ、たまに食へば中毒する、牛乳をのめばそれにも農薬の影響がと云うのではなんのために生きているのか分らない。工場の中でクロレラを培養して食物として生活するとなると今さらに米をたべ、パンを食べ、魚をたべていたところが天国のように思えるかも知れない。

光源は太陽に、肥料は自分の糞便を利用して大地から穀物を収穫して生きて

きた人間であるが、これがひろびろとした自然のもとで鳥が囀り、蝶の飛びかう中で汗水たらしての仕事が農業だが、そしてこれをいぶかる人はないが、同じことを宇宙船の中で、太陽エネルギーで、クロレラを培養するとなると違ってくる、自分の糞便でクロレラを養い、自分の小便を浄化して飲料水として飲む、将来の宇宙旅行は余りたのしいものではないらしい。

このようにかくと非文化主義のようにとられそうだが、しかし文化的とはどうゆうことだろうか、自然をこわし、非自然的なことが文化的なのだろうか、人間の力がまだ弱く自然が圧倒的だったときは、森を切りひらくことだけでも文化的だった、何故ならそれによつて人間生活が確立され、豊かになつたからだったがいまは、一本一草、一虫一獣が貴重になつてきた。自然を切りひらくのでなく、自然を大切にすることが文化的になつてきた。なぜなら自然のない人生など、考えてみてもゾツとするからである。

野にあそんで虫をとらえ、森にあそんで下草をつみとる楽しさをもちつづけられるような文化生活でありたい、共存共栄は人間社会のワクの中だけでなく、動物や植物も仲間に入れてやりたいものだ。

〔鹿児島大学理学部生物学教授〕

# オオオサムシの地方変異 ( I )

給本秀夫・大我俊輔

## <前書>

1963年の冬よりオサ堀に興味を持ち鹿児島諸山や、帰省先の福岡県福智山などで集めたオオオサムシが、相当数集まつたので、その地方変異について調べてみる事にした。

この調査の動機となつたのは、進化論の中にある、地理的隔離説である。つまり、オオオサムシは飛翔能力を欠く昆虫であるから、比較的、交配範囲が狭くなり、地方変異が生じやすいと、予測し、それがどの程度のものであるかを知りたかつたからである。そこで、まず何を比較するかが問題となつたが、オオオサムシ自体が、色、斑文などで比較しにくい昆虫であるから、今回はまず、上翅の正中線の長さで比較する事にした。

なお、最初この調査は給本、大我の2名で行つたが、給本は発表に当り参加出来なかつたので文責は大我が負うものとする。

## <方法>

- 採集した全オオオサムシの正中線を測定し、採集地別に平均値を出す。(別表1)
- 正中線はリバイダーと竹製スケールで測定する。(0.5mmまで有効単位とする)
- 各採集地から、♂♀、それぞれ25匹づつを無作為に選択する。
- ♂♀別々に正中線長のグラフを作る。(別表2)

採集地は

1. 鹿児島県谷山市鳥帽子岳……………(23.XI-1963), (29.II-1964) 採集
2. 鹿児島県霧島山栗野岳……………(5~7.III-1964) 採集
3. 福岡県直方市福智山……………(29.XII-1963), (26.III-1964) 採集
4. 福井県勝山市附近……………採集年月日不明(1963~1964)

実際の測定に当つては、1964年の10月に行つたが、誤差を少なくするように、晴天の日を選んで集中的に測定するよう努めた。測定数は360餘匹で、そのほとんどが、冬期の崖崩しによつて採集したものであり、採集地点も局地的となるから、各採集地内での環境差は小さいものであると思う。しかし、採集地によつては、2~3匹といつた所もあり、♂♀がそれぞれ25匹に満たない所は除き、上記の四地区に縮つた。

## <結果>

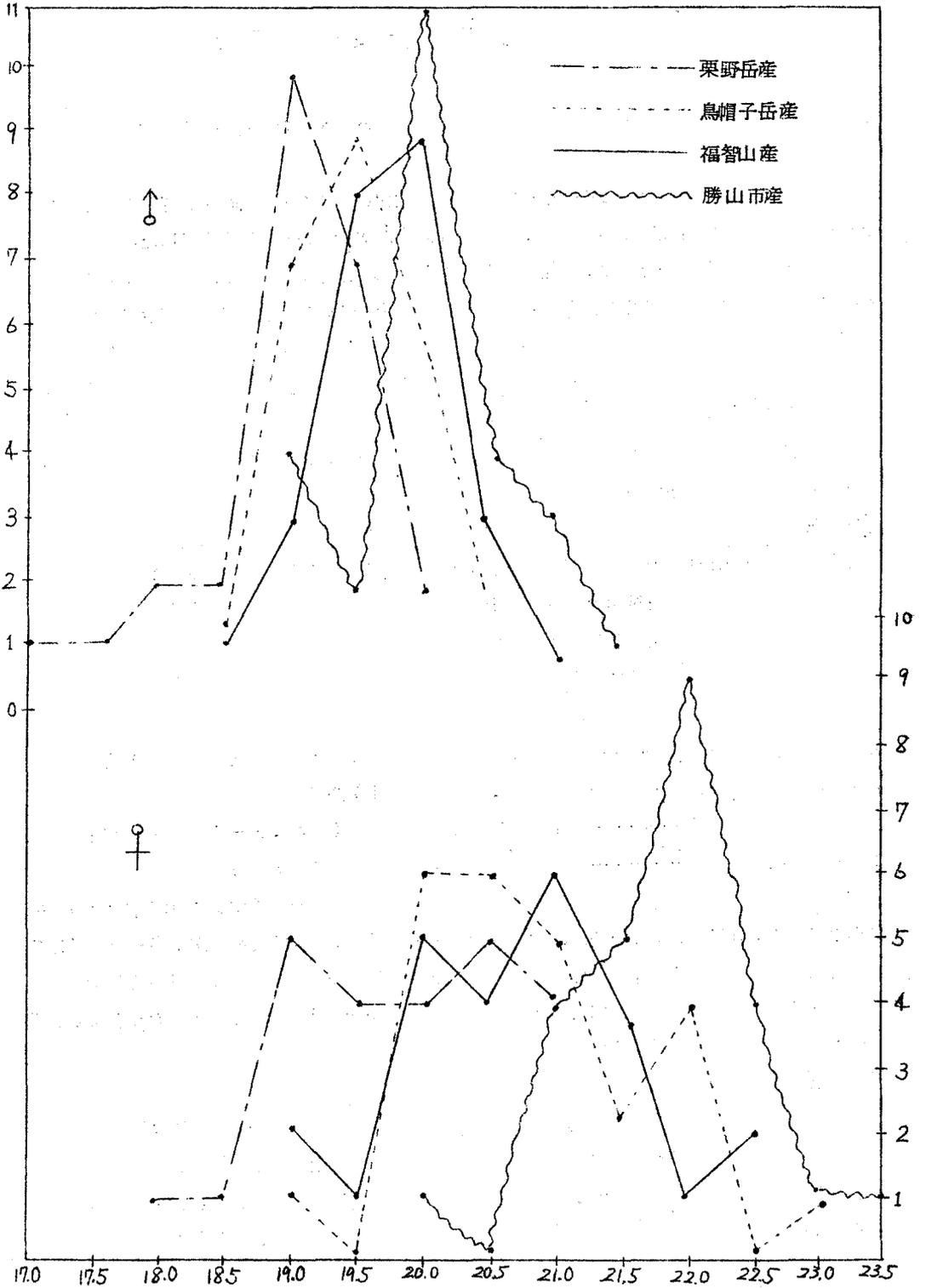
(別表1)

単位はcm (内は測定数)

	鹿児島県鳥帽子岳産	鹿児島県栗野岳産	福岡県福智山産	福井県勝山市産
♂	19.5 (33匹)	19.0 (66匹)	19.8 (29匹)	20.1 (28匹)
♀	20.9 (25匹)	20.1 (61匹)	20.8 (42匹)	22.1 (40匹)

(別表 2)

横軸：上翅正中線長 (cm), 縦軸：匹数

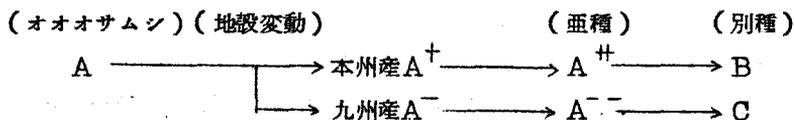


## <検討>

まだ測定対象地域や測定数が少なく、その上、上翅の正中線の比較のみで、地方変異を論じる事は、危険であると思うが、一応、現段階での検討を試ると一般的に次のような事が言えると思う。

1. ♂より♀の正中線の方が長い。
2. 九州産のものより福井県産のものの方が大きい。
3. 同じ鹿児島県産でありながら、鳥帽子岳産は栗野岳産より福岡県福智山産に近い。

2の意味する所は鹿児島県産と福岡県産のいずれよりも、福井県産が大きいという事であり、それは、九州産と福井県産との間に一線を引き得る可能性を示すものであろう。これを隔離説的に考えれば、九州と福井（本州）との間の地理的障害物として、関門海峡があり、それが地殻変動によつて生じて以来、飛翔不能なオオオサムシは、完全に海峡によつて隔離され、九州産と、本州産との間には交配、増殖が起らず、今日までそれぞれ環境で淘汰されて来たと考えられる事が出来る。



3.の現象が表われた原因の一つとして推測されるのは、採集地点の高度差（鳥帽子岳 300m、栗野岳 700m、福智山 300m）による影響であり、高度差が気温や食餌の多少に関連し、鳥帽子岳と栗野岳の水平的同位性より、鳥帽子岳と福智山の垂直的同位性の方がより強く、環境として作用した、という考である。

## <問題点>

1. 体長は、食餌の多少等の環境の変化で比較的容易に変化する、いわゆる適応形質的な面が強い。今回、その一部である上翅正中線の長さで、地方変異を論じたのは少し問題があると思う、次の段階では、遺伝と関連の深い体制形質で比較・検討したい。
2. 現在、九州産オオオサムシには、*subsp. dehaanii*と*subsp. str enus*との二亜種があり、その分類は、上翅第四鎖線の外側が規則的であるか、不規則であるかで分けてあるが、LEBEN 第5号の鹿児島県のオサムシ(1)で嶋洪氏が言われているように、鹿児島県産のものはその変異が僅かで分別はつけにくく、又、*str enus*だろうと予想された福智山産のものも同様であつた。この問題は、もう少し採集地点を増して行くと解決するものと思う。

## <参考文献>

1. 湊 正雄 他(1958) 日本列島 岩波書店
2. 中根猛彦 (1962) 日本昆虫分類図説Ⅱ鞘翅目 オサムシ科I
3. ハンソン (1962) 八杉竜一訳 動物の分類と進化 岩波書店
4. 嶋 洪 (1963) 鹿児島県のオサムシ(1) LEBEN 第5号

(農学部獣医学科4年) (農学部農学科2年)

## 屋久島からの甲虫類の採集記録

嶋 洪

1963年4月、屋久島へ採集に行かれた田中洋、章、南野禰、河野謙一氏らの採集品のうち、河野氏のものを除く全ての甲虫類を筆者が予め預かりした。このうち、カミキリムシ科については、すでにSATSUMA（鹿児島昆虫同好会々誌）41号に発表済みであるので、ここにはその他の甲虫類で、同定のできたものを発表した。

同定はすべて、原色昆虫大図鑑・北隆館（1963）によつたので、種名は和名のみで記した。記録は、採集場所、頭数、採集月日（採集年は全て1963年であるからここには省略する）、採集者の順で記している。また、採集者は、田中洋、田中章、南野禰をそれぞれ、HT、AT、SNと略記した。

### 1. ハンミヨウ

湯泊～小島（3 exs., IV. 12, AT）, 大川流域（1 ex., IV. 12, AT）, 平内（3 exs., IV. 12, SN）, 安房～小杉谷（5 exs., IV. 14, SN）, 安房（1 ex., IV. 16, HT）

### 2. マイマイカブリ

安房～小杉谷（1 ex., IV. 7, AT）

### 3. スジアオゴミムシ

安房～中間橋（1 ex., IV. 7, AT）

### 4. ニツボンヨツボシゴミムシ

栗生（1 ex., IV. 8, AT）

### 5. ヤクツノハネカクシ

安房～小杉谷（1 ex., IV. 7, HT）

### 6. アオバアリガタハネカクシ

安房（1 ex., IV. 14, HT）

### 7. コクワガタ

黒味川流域（1 ex., IV. 9, AT）

### 8. ヒラタアオコガネ

安房（1 ex., IV. 6, AT）（3 exs., IV. 14, HT）（27 exs., IV. 16, SN）, 安房～小杉谷（1 ex., IV. 14, HT）（2 exs., IV. 15, AT）, 栗生～大川（13 exs., IV. 10, HT, AT, SN）, 栗生～湯泊（1 ex., IV. 11, SN）

### 9. ハナムグリ

栗生～大川（1 ex., IV. 10, SN）

10. コアオハナムグリ

栗生～大川(1ex., IV. 10, SN), 安房(2exs., IV. 16, SN)

11. ルリナカボソタマムシ

安房(4exs., IV. 14, HT, AT)(1ex., IV. 15, HT), 安房～小杉谷(6exs., IV. 15, AT), 栗生(1ex., IV. 8, HT), 栗生～大川(10exs., IV. 10, HT, SN), 栗生～湯泊(6exs., IV. 11, SN), 栗生～中間(2exs., IV. 11, AT), 中間～湯泊(1ex., IV. 11, HT), 湯泊～尾ノ間(5exs., IV. 12, SN), 湯泊～小島(5exs., IV. 12, AT)

12. ダンダラチビタマムシ

安房(21exs., IV. 14, HT, SN), 安房～小杉谷(2exs., IV. 14, HT)

13. セボシジヨウカイ

安房(1ex., IV. 6, AT), 安房～小杉谷(3exs., IV. 15, AT), 栗生～中間(2exs., IV. 11, AT), 湯泊～尾ノ間(2exs., IV. 12, SN)

14. ベタリヤテントウ

安房(3exs., IV. 14, HT, SN)

15. コクロヒメテントウ

安房(1ex., IV. 14, SN)

16. ヒメフタモンクロテントウ

栗生～湯泊(1ex., IV. 11, SN)

17. テントウムシ

安房(6exs., IV. 14, HT, SN)(1ex., IV. 16, HT), 栗生(1ex., IV. 8, HT)

18. ナナホシテントウ

安房(1ex., IV. 16, HT), 栗生～湯泊(1ex., IV. 11, SN), 中間～湯泊(1ex., IV. 11, HT)

19. ヒメスナゴミムシダマシ

安房(2exs., IV. 16, HT)

20. キマワリ

安房～小杉谷(1ex., (幼虫), IV. 7 (V. 16. 1963, 羽化), HT)

21. アカクビナガヘムシ

安房(1ex., IV. 10, SN), 栗生～大川(1ex., IV. 10, SN), 大川流域(1ex., IV. 10, HT)

22. ドウガネツヤヘムシ

安房(1ex., IV. 14, SN), 栗生～湯泊(5exs., IV. 11, SN)

23. アカガネサルヘムシ

安房 (2 exs., IV. 14, SN)

24. ウリハムシ

安房 (1 ex., IV. 14, SN)

25. アトボシハムシ

安房 (1 ex., IV. 14, SN)

26. カミナリハムシ

安房 (1 ex., IV. 14, SN)

27. ルリマルノミハムシ

安房 (1 ex., IV, 14, HT) (3 exs., IV. 16, SN)

(農学部農学科 3年)

## 「鹿児島県のカミキリムシ類」の発刊を祝す。

この特集号は鹿児島昆虫同好会機関誌であるSATSUMAで近日中に発刊されるもので、我が生物研究会の会員である、嶋 洪氏が坂本久米雄氏(加世田電報電話局勤務)と共著で、先頃から編集に精だされていたものである。

内容は次のようである。

1. 鹿児島県産カミキリムシ目録(九州本土)
2. 鹿児島県のカミキリムシ分布発生資料と補足(九州本土)
3. 鹿児島県産カミキリムシ一覧表
4. 鹿児島県産カミキリムシに関する文献目録

本文(タイプ)100ページ程度。誌代:1冊約350円。送料:50円

申入先:鹿児島市薬師町91 田中洋方 鹿児島昆虫同好会

# 屋久島の甲虫採集報告(1963年)

河野謙一

昨年(昭和38年)は二回にわたり屋久島に行く機会を得た。昭和38年4月のものは田中洋田中章, 南野稔の各氏がLUBBEN 6号にかいていますので, そのおりの資料のみを提供して割愛いたします。二回目は同じく38年の7月10~18日の間にかけていますので, これを中心に書いてみます。なお, 今年度(昭和39年)は秋休みに一週間ばかり訪島してみましたが, 毎日の悪天候のため収穫はかんばしくなく未だ整理中ですので, 次回にでも譲ることにしました。なお, 今後, 生研部員及び同好会員が数多く訪島されて, 少しでも屋久島の実態調査をしていただきたいことを願つて前向きといたします。

7月9日(出港前日)曇

今回再びでかけることになつたいきさつは, 4月に訪島したとき, 収穫が四分通りで期待に反しましたので, もう一度でかけて, いくらかでも調べてこようと思つたからです。

最初は, 部員といつしよに行く予定でしたが, 都合により単身となりました。内地の方はよく気のむくまま一人で, いくともありますが, 離島となるとちよつと不安な気がしたものです。

どうやら, 梅雨も末期症状で, この二, 三日中に終るものと判断しましたので, 10日に出港することにした。食糧は一週間分, あとは現地補給することにして, すべて万事OK!

7月10日 小雨がち 鹿児島港~安房港

船出のこの日は, あいにくの冷たい雨。「南国情話」の甘いメロディーに送られて, 船中の人となる。屋久島丸には同好の者と思われし学生が三名のりあわせていた。彼らとすぐ親しくなり, 今後のスケジュールの紹介をする。何でも近畿大学の農学部農芸化学科生とのことである。海上はしげで烈風のすさまじき中を「はしげ」で安房上陸。さつそく安房公民館の御厄介になる。公民館の事務をしている例のSchöne Mädchenはまだいたが, 4月のときよりやや太り気味で消沈。Miss AnboとかN君よりきいていたが。……………

7月11日 曇ときどき晴 安房~小杉谷~石塚~花の江河

天気回復のキザンがみえ始める。どうやら前線は北上しているらしい。ネバリネバツタ交渉がかなつてトロ便乗することになつた。小杉谷手前3Kmのところ下車。鉄橋が崩壊しているとのことである。ここから歩いて小杉谷についたのが9時半過ぎ。小休息をする。曇日和のためかバタフライが顔をあまりみせない。ここでは, ウスイロコノマ(♂?), アオバヒシリ, ツマベニ, アオスジ, カラスetc.を目撃。(コガネムシ, カメムシを専門としていますので, 蝶の方は採らないことにしています。) 小杉谷(10:30)~石塚~花の江河(5:30)

10時半から花の江河に向けて出発。石塚あたりでは子供らが小生をもの珍らしげにみしてくれる。「オカシナオツサンが来たわい」とでも思つているのだらう。ここで小雨に会う。まつたくいやな屋久雨の歓迎, 何度かこの屋久島に来て思うことは, 来訪者にいやがられるこの屋久雨にも

旅情というのか、何か文学的価値があるのではないかと思う。ちょうど、林フミ子の作品やサマヒット・モームの「The Rain」などにみられるが如く……………こういうことを考えながら昼食をすませる。トロ終点の「中の小屋跡」をすぎるとなかなかの苦しいコースである。〈参考までに：39年10月現在のこの小杉谷～花の江河コースは9月の例の台風のため、軌道が破壊され、倒木などで通行不可地域が非常に多い。今後はこの方面は遠慮された方がいい。〉丸木橋、はしご、倒木のくぐりぬけと無数のシリーズで、宮崎県北部の大崩山(1643m)を思わせるようなところである。このあたり、名物の屋久杉は記念物的にあるものの、ほとんど切り尽くされて、見る影もないのが惜しまれる。この急勾配では、何しろリュックが重いので、採集より歩くのが精一杯というところであつた。破損品(?)ではあつたが、チャイロヒゲピロウドカミキリを一頭つかまえ、その他めぼしきものを数頭……………

晴れた日であるなら、このコースはねばりさえすれば、採れそうなところである。あいにく烈風にて原始林のゴォーとうなりをあげて叫ぶのには、迫力ありて遠来の客にとつて演出過剰である。4時をすぎると、密林中ゆえ、なおさら暗くなつてきた。近畿大生も前後してついできた。ガスが濃く、霧雨がふりかかつて視界悪し。この日は5時30分で花の江河1km手前のところでピバークすることにした。夏とはいえ6時近くなると明りのいるほどの暗さにて、花の江河までいけなかつたのが残念である。

7月12日 晴・視界悪し 6時起床 花の江河～黒味～宮の浦岳往復

荷物をまとめて、花の江河までいく。ここの1kmは1時間もかかるのにはまいつてしまう。小屋は今冬の雪でつぶれて見る影もない。絵ハガキでみる通りの美しいところで、ちよつと小さな尾瀬沼を思わせる湿地帯で、ここに「ヤクシマンヤクナゲ、ミスゴケ、ヤクシマンオガマ、ツゲ etc.」がみられた。残雪が最近まであつたのであろうか(この年は80年ぶりとかの大雪にみまわれた。)木々の色が以外に明るい黄緑色で、冷々としていた。

ここに荷物をおいて、ネット、殺虫管にサブ・キスリングのいでたちで黒味岳へ。30分で黒味岳(1836m)へ登頂。梅雨あがりのためか濃霧といつていい位の視界の悪さで、宮の浦・永田岳もみえず、眼下の花の江河がみえかくれするのみである。この黒味附近には、ヒメイワカガミが赤い花を、又名の知れぬ高山植物がいろいろとカラフルな花を咲かしていたが、名前のわからなかつたのが残念である。黒味岳をおりて、宮の浦隴線へ2時間、途中、「つくし、安房、翁岳と1800m級の山腹を縦走。宮の浦岳では、「モンアシナゴカガネ」5匹ほか、ハエを数種也で、たいしたもののは得られなかつた。屋から宮の浦岳～永田岳あん部へ向う。かなりの急傾斜ではあるが、附近の谷には、陽をうけて暖たまつている水たまりにミスゴケ、モウセンゴケなどが繁茂、ところによつては、ヤゴのみられる可能性もあると思うが、いかがであらうか?

昨夜の台風情報さえなかつたら、永田コースをとるつもりで、リュックをもつてくる予定であつたが、未知コースであり、天候が好ましくないで宮の浦岳を通つて花の江河へもどることにした。……………

7月13日 雨ときどき曇 花の江河～小杉谷～安房

晴れてくれるとこの小杉谷～花の江河コースも、いろいろとおもしろいのが採れると思うが、何日もねばるわけにはいかないので安房にひきかえす。下りであるから、27kmのこの行程もさほど苦にはならない。……………

たい在4日目というのに、まだほとんど採っていないので、これから大いにハツメルことにして安房泊り。夜になつて暗い港のブルースの流れるバー見物をして、夜間採集。丘の上の安房小学校、昼であれば種子島のみえる海岸通りの水銀燈の下で5時間餘りもいたかいありて、「採れるわ、採れるわ」このときほど、燈火採集のありがたみ(?)を感じたことなし。量的に大量にとれるし、コガネのみならずカメムシ、カミキリの類の珍らしき奴から夜の蝶までギョウサンである。……………

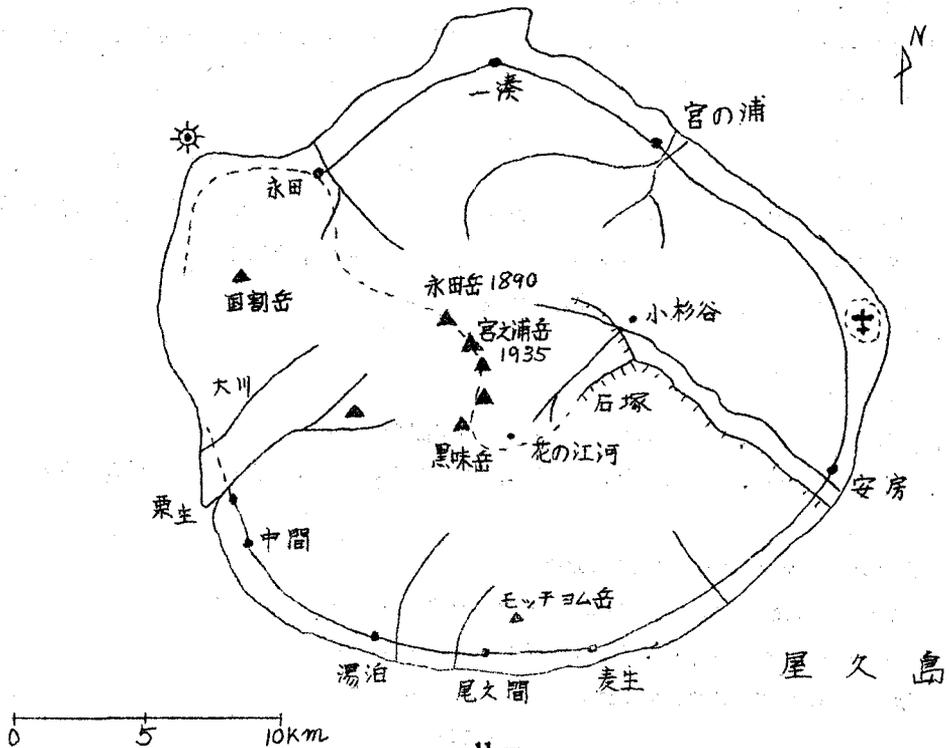
7月14日 曇 安房滞在

この日も安房近くの山歩きをすれども、にわか雨に降られ通し。夜は同じく燈火採集。あんまりよくとれるので「屋はねてくらせばよい」などとぬかしたものである。

7月15日 晴 安房～永田

先の近畿大生と別れ、バスで永田へ行く。山歩きをしたみたが、ここでは南部海岸のように多くヘゴがみられず、たまにみるのみである。なるほど、植物は寒暖に鋭敏なる天然のインディケーターであると感心したものである。すれば、昆虫相もかくの如しというわけであろう。

ありきたりのコガネを探るにとどまつた。永田川に赤く染まつた永田連峰がうつつている様、及び、硫黄島、口之永良部島の中間あたりの大洋に陽の沈む美しさは、何とも記しがたい。



永田小学校にお世話になりましたが、尾上校長夫妻はじめ、いろいろと暖かいもてなしを受けて感謝感激。屋久島で一番人情のお熱い(?)ところと思いました。

7月16日 曇ときどき晴 永田〜宮の浦〜島間(種子島)〜上中(中種子)

昨日の一日だけでたいして採れそうなところでなかつたので、(ただし、永田川から支流を渡つて永田岳へ行く途中は道がよく整備されており、ハンミョウとかカミキリが期待できそうである。又、永田から永田岬の燈台附近もいい)宮の浦港から種子島にわたることにした。中種子の島間から歩いて二時間餘、上中の中平小学校のお世話になる。種子島の方が屋久島より、いづらか開けている感じである。島の中央にあると思われるこの上中(カミナカ)も、西に屋久島をあおいで遠々とつづくサトウキビ畑に囲まれた美しい街であつた。

7月17日 上中〜門倉岬(南種子)

朝早く、中平(ちゆうへい)小学校の先生の厚意により、オートバイで中種子の製糖工場の見学、そのほか、いろいろと種子島のことについて教えてくれ、今後の採集旅行の良きガイドンスであつた。なかなか料なベツピンを乗せて走るこのバスにのつて、鉄砲伝来で有名な門倉岬へ。岬突端まで歩いて10分ばかり、荒波にもまれてくださる白波の美しいところにて、これほどの歴史的重要性をおびるこの地が、以外にひっそりと人待ちのていであるのは離島のせいであろう。いろいろと珍らしき南方性の植物が茂つて、特にマメ科植物には何かいるものと期待したのにながかりであつた。早起きは三文の得なるものを守らなかつた本日は、屋の太陽がジリジリと輝いているところを虫を捜そうとする方がムリのようなのである。バスの便なくして、帰りは10Km餘り歩いて上中へ。この日、小学校へもどつてみると、広島より電報ありて、帰鹿することになつた。夏期セミナーのためであるがあと、4〜5日ほどこの中種子を北上して採集旅行を終えたかつたのにまことに残念でならない。

7月18日 晴 西の表から帰鹿

以上のようなわけである。この採集旅行に際してIEBEN 4号、成見和総氏の「屋久島採集紀行」etc.を参考にさせていただきました。なお、訪島中、いろいろと御世話下さつた安房の区長さん、永田小学校、中平小学校の皆さん及び近畿大生の皆さま、そして4月に同行された田中洋、田中章・南野綱の各氏に心から御礼申し上げます。

### 採集記録

前述の如く昭和38年4月及び7月の2回の採集記録です。

筆記順：種名、場所、採集個体数、採集日、特記しない限り、私自身の採集によるものです。

#### ◎コガネムシ科 Scarabaeidae

- Var. *Maculata* Bates モンアンナガコガネ  
宮の浦岳、(5), VII. 12, 1963 (以下省く)
- Var. *ochroptera* Ohaus スジコガネ

- 安房, (1), VII. 14
- *Var. Castanipennis* Ohaus ヒメコガネ  
安房, (2), VII. 14
  - *Popillia japonica* Newman マメコガネ  
永田, (2), VII. 16, 他, 種子島の門倉岬, 安房で目撃。
  - *Gastroserica herzi* Heyden チヨウヒンシマビロウドコガネ  
小杉谷, (3), VII. 11
  - *M. Satumaenis* Nijima Kinoshita サツマコフキコガネ  
宮の浦, VII. 16, 目撃
  - *Melolontha japonica* Burmeister コフキコガネ  
安房, ♂(1), VII. 15
  - *Anomala albopilosa* Hope アオドウガネ  
安房, (13), VII. 14; (4), VII. 15
  - *Anomala multistriata* Motschulsky ハンノヒメコガネ  
安房, (1), VII. 14
  - *Mimela cuprea* Hope ドウガネブイブイ  
安房, (3), VII. 14; (2), VII. 15  
永田, (1), VII. 16
  - *Allomyrina dichotoma* Linne カブトムシ  
安房, ♂(2), ♀(1), VII. 14
  - *Anomala octiescostata* Burmeister ヒラタアオコガネ  
安房, (16), IV. 14; (5), IV. 15  
湯泊, (29), IV. 11; 小杉谷, (25), IV. 13  
大川~栗生, (9), IV. 10  
(備考, 体長9~12mm, 体色赤銅~青銅~濃青色にいたるまでいろいろみられ, 個体変異がいちじるしい。主に畑, 路上にて採集。)
  - *Blitopertha orientalis* Waterhouse ヒマダラコガネ  
花の江河, (2), VII. 11  
安房, (1), VII. 15  
(備考, これは, コゲシマビロウに酷似していて判定困難である。)  
〈ハナムグリ〉
  - *Oxycetonia jucunda* Faldermann コアオハナムグリ  
安房, (1), VII. 14; 〈備考 この種か  
Var. *ferruginosa* Reitter (同)をV. 26, 1963, 桜島で採集している〉
  - *Eucetonia pilifera* Motschulsky ハナムグリ

中間, (2), IV. 11, 田中洋氏(採)

- *Protaetia brevitarsis* Lewis シラホシハナムグリ  
門倉岬(種子島), ♂(1), VII. 18
- ◎カミキリムシ科 Cerambycidae
- *Purpuricenus spectabilis* Motschulsky ヘリグロベニカミキリ  
安房, (1), IV. 16; (備考, 出現が少し早い感じ)
- *Eurypoda batesi* Gahan ベーツヒラタカミキリ  
安房, ♂(3), VII. 14; (備考, 体長34~36mm安房海岸のマツの木にて)
- *Prionus insularis* Motschulsky ノコギリカミキリ  
安房, ♂(1), VII. 14; (備考, ベーツに同じくマノの木にて)
- *Acalolepta luxuriosa* Bates センノカミキリ  
花の江河, ♂(1), VII. 11
- *Acalolepta fulvicornis* Pascoe チャイロビロウドカミキリ  
花の江河, (1), VII. 11; 破損しているのが残念
- *Strangalia gracilis* Gressitt オオシマホソハナカミキリ  
花の江河, ♀(1), VII. 11; ♂(1), VII. 11
- *Leptura kurosonensis* Ohbayashi クロソンホソカミキリ  
宮の浦岳, (1), VII. 12
- *Chlorophorus signaticollis* Castelnau et Gory ウスグロトラカ  
ミキリ 安房, (1), VII. 15
- ◎カミキリモドキ科
- *Oedemeronia sexualis* Marseul フタイロカミキリモドキ  
大川, ♂(1), IV. 10; 栗生, ♀(1), IV. 11
- ◎カメムシ科
- *Eucorysses grandis* Thunberg オオキンカメムシ  
湯泊, (1), IV. 12
- *Acanthosoma labiduroides* Jakovlev ヘサミツノカメムシ  
石塚~花の江河, (1), VII. 13
- *Scotinophara lurida* Burmeister クロカメムシ  
安房, (1), VII. 14; (1), VII. 15
- ◎ナガカメムシ科
- *Lygaeus belogolewi* Jakovlev ヒメノユウノナガカメムシ  
栗生, (1), IV. 9; 大川, (2), IV. 10; 湯泊, (1), IV. 12
- ◎ヘリカメムシ科
- *Homeocerus unipunctatus* Thunberg ホシハラビロヘリカメムシ

安房, (1), IV. 15

- *Homeocerus dilatatus* Horvath ハラビロヘリガメムシ  
石塚, (1), VII. 11; 安房, (1), IV. 15

◎ホシカメムシ科

- *Physopelta cincticollis* Stal ヒメホシカメムシ  
安房, (1), VII. 14

◎クビナガカメムシ科

- *Hoplitocoris lewisi* Distant ヒメクビナガカメムシ  
石塚〜花の江河, (1), VII. 11

◎イトカメムシ科

- *Blissus pallipes* Distant コバネナガカメムシ  
安房, (3), IV. 14, 田中洋氏(採)

〈備考〉カメムシについては目下調査中ですが、未だ二種の名前がわからないので、省略しました。不明-A; 体長6mm, 石塚〜花の江河, VII. 11

不明-B; 体長11mm, 石塚〜花の江河, (1), VII. 11; (1), VII. 13

◎ハンミョウ

- *ab. Yakushimana* Nakane (*Sophidela* 属) ハンミョウ  
安房, (1), VII. 14; 石塚, (3), VII. 11; 永田, (1), VII. 17

〈備考〉体長17~19mm, やや小型である。

その他、ゾウムシ, ゴミムシなども採集しましたがこの方面は詳しくないので省きました。同定は自分でやりました。

(文理学部3年・化学専攻)

## タテハモドキ目撃記録

田中章

1963年10月6日鹿児島県指宿郡千貫平の登山道中腹の畑でタテハモドキ(多分夏型)を目撃したので報告する。

(農学部農学科3年)

# 屋久島採集標本箱

永吉正義 中田一章 上宮健吉

私達は、1964年8月10日より25日まで屋久島の各地を歩きました。台風16号の襲来で一時は飢餓状態まで陥つたこともあり、かくれたエピソードもありました。何しろ大学にはいつた早々で十分な調査も出来なくて、採集品や観察記録も少いですから、ここに「標本箱式」に発表いたします。

Table 1

採集コース	安房	安房 小杉谷	ウイ ルソ ン 株	小杉谷 宮之浦岳	小杉谷 安房	栗生
1964年8月	10	11	12	13	14	15
天候	晴	晴	くもり雨	くもり雨	晴	晴
1.アオバセセリ	1目撃	1♀				幼虫1
2.チャバネセセリ		2exs	+	+		
3.イチモンジセセリ		2exs			1ex	1ex
4.クロセセリ					1♂1♀	2exs
5.アゲハチヨウ	1♂	1♂	+			1♂
6.アオスジアゲハ	+	#	+		3♂2♀	2♀
7.ミカドアゲハ					1♀	
8.キアゲハ				1♂		1♂
9.クロアゲハ	+			+	1♀	1♂
10.モンキアゲハ	1♀	+	+	+	+	
11.ナガサキアゲハ	3exs	1♂1♀	+		+	1♂
12.キチヨウ	1♂	3exs	3exs	+	+	1ex
13.ツマベニチヨウ		+				+
14.モンシロチヨウ	+		2♀			2目撃
15.スジグロシロチヨウ			5♂1♀	1♀		
16.カバマダラ	1♂					
17.ヒメウラナミジヤノメ	1ex	8exs	4exs	+	7exs	+
18.ヒメジヤノメ	1ex	+	1♂			1ex
19.キマダラヒカゲ		3目撃	6exs	+		
20.クロコノマチヨウ	1♂1♀	+	1♂2♀	2♂		3目撃

尚、カバマダラは大発生で安房、中間、原で幼虫、卵を採りましたが詳細は後で発表します。  
最後に、出発にあたり色々御指導下さった福田晴夫、田中洋の両氏と、僕達と同行して協力して  
くれた前田一郎君に、厚くお礼申し上げます。

〔記号の説明〕

個体数 # 20頭以上    † 5～10頭    + 5頭以下

栗 生	栗 生 湯 泊	湯 泊 平 内	尾 之 間 原	原	宮 之 浦	宮 之 浦	宮 之 浦
16	17	18	18	19	21	24	25
雨	くもり雨	くもり	くもり	雨	雨くもり	晴	晴
+	† 2exs 3exs	+		+		† †	†
+	+	+	+	+			
#	1♀			+			
1♂1♀	1♂1♀			+			
2♂	1♂1♀						
+	1♂ 1目撃	1♂	1♀	+	2♂ 2♂	2♂	†
	5♂7♀		1目撃				
†	†	†			1ex	†	
1♂							
1♀					1♀1ex	1♂	

Table 2

採 集 コ ー ス	安 房	安 房 小 杉 谷	ウ イ ル ソ ン 株	小 杉 谷 宮 之 浦 岳	小 杉 谷 安 房	栗 生
1964年8月	10	11	12	13	14	15
天 候	晴	晴	くもり雨	くもり雨	晴	晴
21.ウスイロコノマチヨウ						
22.スミナガン	1♀	1♂	+		1♀	1♂
23.インガケチヨウ			2♀			1♂1♀
24.コミスジ						1目撃
25.アカタテハ						
26.メスアカムラサキ						
27.ルリタテハ			2♂1♀		+	
28.タテハモドキ						2♂1♀
29.リユウキユウムラサキ						
30.ツマグロヒョウモン	1♂	2♂1♀	1♀	2♂1♀	1♂	+
31.ウラギンシジミ	2♀	+		+	1♀	1ex4♀
32.ムラサキツバメ	10♂	+			1♀	
33.ムラサキシジミ	1♂3♀	1♀	1♂3♀		+	1♂2♀
34.ウラナシジミ	3ex8		6ex8	+	+	
35.ヤマトシジミ	5ex8	19ex8	7ex8	+	8ex8	2ex8
36.ルリシジミ		1♂	1♂	1♂		2♂
37.サツマシジミ		1♀	1♂			
38.ヤクシマルシジミ		2♂	3ex8		3ex8	1♂

## 後 記

- 屋久島での越冬がわからないアマミウラナシジミの成虫，幼虫いずれも全く発見出来なかつた。
- 迷蝶として，リユウキユウムラサキ，メスアカムラサキ，ウスイロコノマチヨウ，カバマダラを発見し，カバマダラ，メスアカムラサキの一時的発生をみとめた。
- 栗生でのカバマダラの採集記録（1964年7月初めの栗生小学校生による）を先生より聞いた。
- ミカドアゲハの8月の記録は初めてと思われる。
- 蛾類も小杉谷等で多少採集した。

栗 生	栗 生 湯 泊	湯 泊 平 内	尾 之 間 原	原	宮 之 浦	宮 之 浦	宮 之 浦
16	17	18	18	19	21	24	25
雨	くもり雨	くもり	くもり	雨	雨くもり	晴	晴
					1♀1exs		
1目撃							
2♀		1♂			1exs	1♂1♀	
	1♀					1♀	1♀
3♂1♀	2♂2♀	1♀			2exs		
+	+						1♀
	1♀	+	+	3♀			
+		+	+				
	3exs					2exs	
5exs	3exs	+	+	11exs	#	#	21exs
	1♀					1♂	

再度屋久島でオニクワガタを採る

今度の採集旅行中、8月13日、花の江河のすこし先で鹿児島県3頭目のオニクワガタを採集しました。これは屋久島で以前1頭採集されていたもので、これによりあらためて、分布が確認されました。 中田一章

(永吉正義：農学部農芸化学科1年，中田一章：農学部林学科1年，上宮健吉：農学部農学科1年)

# 佐多 1963 年秋の蝶

田 中 章

私は 1963 年 10 月 15 日から 18 日の 4 日間試験休みを利用し、友人池田豪憲君と鹿児島県肝付郡佐多岬方面に採集に行つた。迷蝶に遭遇することを期待していたが、ギンモンウスキチヨウ以外は何も目撃さえ出来ず、目ぼしい収獲もなかつたが蝶類の目撃と採集記録にアサギマダラの観察記録を含めて報告する。

旅行中お世話になつた池田君、宿舎を貸して下さつた農学部造林教室、佐多でお会いし色々楽しくお話し出来た村井昭氏に感謝します。

## コースおよび日程

10 月 15 日

西鹿児島発(8:38)汽車 山川港(11:00) 船 伊座敷(12:00) バス 大泊(12:40) 田尻へ採集 → 宿舎(17:30) 大泊

10 月 16 日

大泊(10:00) → 田尻 → 佐多岬(12:00) 採集(16:00) → 田尻 → 大泊(18:00)

10 月 17 日

大泊(9:15) → 外之浦 → 間泊 → 竹之浦 → 古里(13:00~14:00) → 竹之浦 → 間泊 → 外之浦 → 大泊(18:30)

10 月 18 日

大泊(8:30) バス 島泊(9:00) 採集(12:00) バス 伊座敷(12:20) 採集(16:00) 船 山川 → 西鹿児島

採集・目撃記録 (卅多い, 卅普通, +少い, で地名は田尻は田, 大泊は大, のようにした)

## セセリチョウ科

### 1. チャバナセセリ

全コースに一番多くウツギ, オイランアザミに多く吸蜜に来ていた。

### 2. イチモンジセセリ

全コースで前種に次いで多く前種同様ウツギ, オイランアザミに吸蜜に来ていた。

### 3. クロセセリ

大. 1目(x.15), 大 → 田. 2exs採(x.16) → Pos 村井昭

## アゲハチョウ科

### 4. アオスジアゲハ

大.+ (x.16), 岬.+ (x.16), 外 → 間.+ (x.17), 竹.+ , 古.+ 卅(x.17), 島.+ 卅(x.18), 伊.+ (x.18)

5. キアゲハ

竹・1♂1♀採(X・17), 古・+(X・17), 島・1目(X・18)

6. アゲハチヨウ

大~田・+(X・15), 大・田・岬+(X・16), 大・+(X・17), 竹・+(X・17), 古・+(X・17), 島・伊・+(X・18)

7. クロアゲハ

岬・1目(X・16), 外~間・1♀目(X・17), 島・+(X・18)

8. ナガサキアゲハ

島・1♂目(X・18), 伊・+(X・18)

9. モンキアゲハ

竹・1目(X・17), 古・2目(X・17), 島・+(X・18)

シロチヨウ科

10. キチヨウ

大~田・+(X・15), 大・+(1♂採X・16), 田・岬・+(X・16), 外・+(X・17), 外~間・+(3ex採X・17), 竹・+(X・17), 古・+(X・17), 島・+(X・18), 伊・+(X・18)

11. ツマグロキチヨウ

大・+(1♂採X・16), 岬・+(X・16), 外~間・+(X・17), 竹・+(X・17), 古・+(1ex採X・17), 島・+(X・18)

12. モンキチヨウ

田・1目(X・16)

13. ギンモンウスキチヨウ

田・1♀(X・16), 島・1♂(X・18) これはSATSUMA 38号に発表済み。

14. ツマベニチヨウ

田~岬・6ex目(X・16) 村井昭氏御教示・大・1♀目(X・17), 古・3♂目(1♀採X・17), 島・+(9♂1♀採X・18)

15. モンシロチヨウ

大・+(X・16), 田・+(1♂採X・16), 岬・+(X・16), 外~間・+(X・17), 間・+(X・17), 竹・古・+(X・17), 島・伊・+(X・18)

16. スジグロシロチヨウ

島・伊・+(X・18)

シジミチヨウ科

17. ムラサキシジミ

岬・+(X・16), 古・(1ex採X・17), 島・+(X・18)

18. ムラサキツバメ

大～田・卍(X.15),大・卍(1♂1♀採X.16),田・+(X.16),岬・卍(2♀採X.16),竹・古・卍(X.17),島・卍(X.18),伊・卍(X.18)

19. ウラナミンジミ

大・+(1♂採X.15),大・田・+(X.16),岬・卍(X.16),大・外・+(X.17),外～間・間・竹・古・卍(X.17),島・伊・卍(X.18)

20. ヤマトシジミ

大・卍(4♂3♀採X.15),大・卍(2♂採X.16),田・卍(6♂3♀X.16),岬・卍(21ex♂採X.16),大・外・卍(X.17),外～間・卍(4♂1♀採X.17),間・竹・古・卍(X.17),島・伊・卍(X.18) 標本は南野綱氏保管

21. ルリシジミ

大・卍(2♂採X.15),大・卍(1♂2♀採X.16),田・卍(X.16),岬・卍(X.16),大・+(X.17),外・卍(X.17),外～間・卍(X.17),間・卍(X.17),竹・古・+(X.17),島・卍(1♂採X.18)

22. サツマシジミ

大・(1exX.15)村井昭氏採,島・+(3♂採X.18)

23. ツバメシジミ

外～間・(1♂採X.17)

24. タイワンツバメシジミ

大・(2♂採X.15),大・(1♂採X.16),外～間・(1♂採X.17)

ウラギンシジミ科

25. ウラギンシジミ

大・田・岬・+(X.16),外～間・卍(X.17),間・竹・+(X.17),古・卍(X.17),島・卍(X.18),伊・+(X.18)

マダラチヨウ科

26. アサギマダラ

大～田・卍(1♀採X.15),大～田・卍(1♂1♀採X.16),田・+(X.16),岬・卍(X.16),島・卍(2♀採X.18)

タテハチヨウ科

27. ツマグロヒョウモン

大・+(X.16),田・卍(X.16),岬・+(X.16),間・卍(X.17),竹・古・卍(X.17),島・+(X.18),伊・卍(X.18)

28. コミスジ

大・1目(X.15),大～田・卍(X.16),外～間・間・+(X.17),竹・卍(X.17),古・+(X.17),島・卍(X.18),伊・+(X.18)

29. キタテハ

島・1目(X・18)

30. アカタテハ

岬・1目(X・16), 古・1目(X・17)

31. タテハモドキ (F:秋型, S:夏型)

大・2目(1F♀採X・16), 田・+(1S♀採X・16), 岬・+(X・16), 竹・+(1S♂採X・16), 古・卍(1S♀, 3F♂, 1F♀採X・17), 島・+(2S♂, 1F♂採X・18), 伊・卍(1S♂, 2F♂, 1F♀採X・18)

32. インガケチヨウ

田・3目(1♀採X・16), 岬・1目(X・16), 竹・1目(X・17)

ジャノメチヨウ科

33. ヒメウラナミジャノメ

大・(1ex採X・16)

34. ウラナミジャノメ

大・(1ex採X・15), 大・+(2ex採X・16), 岬(1ex採X・16), 外〜間・1目(X・17), 古・+(X・17), 島・+(X・18), 伊・+(1ex採X・18)

35. クロヒカゲ

古・+(X・17), 島・卍(X・18)

36. クロコノマチヨウ

大・(1ex採X・15) 村井昭氏採集

アサギマダラの休止行動の観察

X・15, 14:30~15:30の頃大泊の海岸から田尻への峠の頂上附近で次のことを観察した。当時曇り空で、この附近は特に暗くカメラのシャッターがF・4の1/15で写らないほどであった。道路添いにオイランアザミが咲きつぼみと咲きその暗い所にアサギマダラが10数頭フワフワと飛んでいた。飛ぶ範囲は大体花の附近の5~6mの範囲で、吸蜜し、時々そばにある数メートル以内の枯枝の下に向けた部分や、つるのたれさかつたものの先端(時々途中)に止まりすぐにブラリとさがるようにして止まる。中、後脚でつかまり、アンテナはほとんど上方に近く、翅はほとんど垂直で後翅は前翅に入れて後翅の前縁が少し出ている様であった。個体の間は20~30cmの近くまでは止まつたが集団でくつついて止まる様子はなかつた。3頭が近くに止まつている時、1頭が飛び出したら次々に他の2頭とも飛びだして附近をしばらく飛びまわつた後また花に行くのと止まるのがいた。この止まる様子など越冬と関係があるのだろうか。

その他

シバハギは大泊から古里までは点々とあつたがタイワンツバメシジミの成虫は外之浦と間泊の間でしか発見出来なかつた。シバハギは花がすこしあり、実はあまりなかつたし、時期がふそいせいもあるだろう。

竹之浦(X・17)のトウワタ(約10本)でカバマダラをさがしたが何もいなかつた。

(農学部害虫学専攻3年)

# セセリチョウ科の Pumping の記録

田 中 洋

1)  
磐瀬太郎氏によると蝶と水の関係に①mud-puddling (湿地に集まる蝶の)②washing (口吻で水を吸つて、それで身体を洗う動作)③bathing (水浴)④pumpingの4つがあげられている。

その中で、ここでは pumping といわれる「口から液体を吸いながら、尻から液体を出す行動」について、私のもつ断片的な観察記録をまとめてみた。この習性が、どんな種類にあつて、どんな種類にないか、どんな意義があるか、という問題を調べることは興味があり例数をふやしていく必要があると思う。セセリチョウ科4種についての記録は次のようなものである。

## 1. オオチャバネセセリ (図参照)

1962年7月11日 霧島山麓・栗野町永谷～栗野岳温泉 天気(晴)：新鮮な1頭が路上の牛フンの上で止つて口吻を出している。よくみると口吻の先端は腹端の下までとどいて、さかんに吸つているような動作である。数10秒おきに尾端を下にまげて自分の排出液を牛フンの上にかけている。牛フンは乾燥していないが、うすめるのか、とかすのか。5分間眺めていたが牛が通つたために逃げて性別は不明。(10時22分～27分)

## 2. アオバセセリ

1962年7月13日 霧島山栗野岳温泉 天気(曇)：新鮮な1頭が乾いた土の上で口吻をのばしていたが、よくみないうちに飛去つた。しばらく後、また止つている個体をみていると、尾端をまげて排出物を出したが、近よれずに吸汁しているかどうかはわからなかつた。(7時55分) 同日、すこしはなれた地点で石の上に白い鳥のフンがあり、小破1♀が止つてハネをふるわせているのをみた。鳥のフンは乾いていたが、数十秒ごとに尾端をまげて排泄し、口吻を出してはいたが、口吻の先端が尾端の下まで達していたかは見えなかつた。(8時45分) いずれも敏感で近くからその全行動を眺めることはできなかつた。

## 3. コチャバネセセリ

1962年7月13日 始良郡栗野町永谷 天気(曇)：新鮮な1頭が乾いたコンクリートの溝の上に止つて口吻を出している。水はないし、何を吸つているのか。また、排泄もしない。(15時40分)

1962年8月12日 肝付郡大根占町神川 天気(快晴)：湿地の上に新鮮な2頭が降りていた。口吻が遠くからみえず吸水をしているかどうかわからないが、時々尾端を下にまげる動作がみられた。(正午頃)

## 4. クロセセリ

1963年8月12日 肝付郡佐多町大泊～田尻 天気(晴)：1♂がホウロクイナゴの葉上にある白い鳥のフンに止つて口吻をのばしていた。樹林内の日光のもれる路傍で、地表すれすれ  
鹿児島大学生物研究会 機関誌 LEBEN 第7号 : 1965年3月

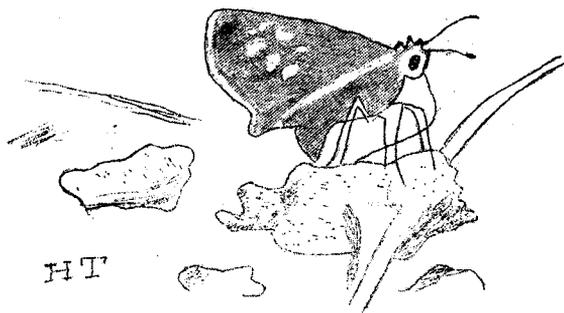
にある葉で、鳥のフンは乾いていた。そのためか、尾端をすこし下にまげて少量ずつ黄色で粘り気のすくない液を2分間に5回排出した。とかすしぐさをしてから吸うのがみられた。かなり近よつて観察できたが、2分間でとび去り、しばらく待つても帰つてこなかつた。(10時0分～02分) 福田晴夫氏との共同観察による。

④オオチャバネセセリと同じ日、同じ所でダイミヨウセセリ1頭も牛のフン上に止つていたが自分の排出液を出すしぐさはしなかつたし、ハネは①～④がすべて閉じるかV字形に開いている姿と異り、ほとんど水平か、カサ状にひろげていた。(10時12分)

そのど、そのような例をみるチャンスがない。従来の文献によつて、内田氏<sup>2)</sup>のキバネセセリ(イチモンジセセリ、オオチャバネセセリ、コチャバネセセリ)、酒匂氏<sup>3)</sup>のイチモンジセセリ、高倉氏<sup>4)</sup>のコチャバネセセリ、枝氏<sup>5)</sup>のオオチャバネセセリ、イチモンジセセリ、岡田氏<sup>6)</sup>のチャバネセセリ、平井氏<sup>7)</sup>のイチモンジセセリ、信太氏<sup>8)</sup>のヘリグロチャバネセセリなどを知ることができた。(内田氏の原典およびそれ以前のもの未見) これで合計8種のセセリチョウ類で似たような行動がみられたことになる。いろんな条件のもとで似たような行動が起つていることは、特殊な習性でないのではないかという感じもする。磐瀬氏<sup>1)</sup>によると、ある種のガにも例がある(蛾類通信 13号, 1958)という。

#### 参 考 文 献

- 1) 磐瀬太郎(1964) チョウの水浴、蝶と蛾 14(4):102~103
- 2) 内田 享(1946) [未見], 虫界速報 (13~14)
- 3) 酒匂 満(1951) クソクウムシ, SATSUMA 1(2):8
- 4) 高倉康男(1954) コチャバネセセリ排泄物を吸う, 新昆虫 7(13):32
- 5) 枝 重夫(1955) キマダラヒカゲが汗を吸う, 新昆虫 8(5):51~52
- 6) 岡田豊日(1955) こん虫の生活(金子書房):137
- 7) 平井 勇(1957) イチモンジセセリの一習性, 新昆虫 10(3):51~52
- 8) 信太利智(1963) ヘリグロチャバネセセリ排泄液を吸う, 佳香蝶 15(55):125~126



オオチャバネセセリ  
(写真より)  
1962.VII.11

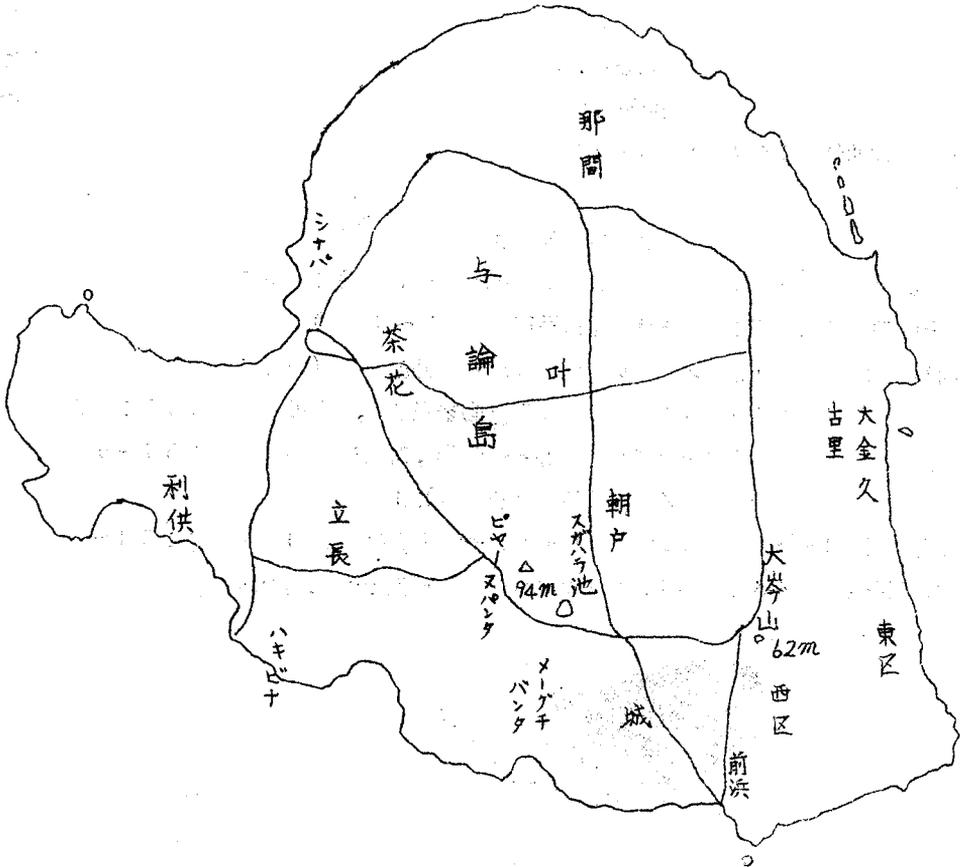
(医学部・専四年)

# 与論島採集植物目録予報

池田 豪 憲

本予報は1961年8月から1964年8月迄に5回に亘つて与論島に帰省した際、採集したものを標本によつて記す。LEBBEN(第5号)に採集記録として記したもののうち、与論島の分は整理の意でここに包括する事にした。又稀産のものは採集場所を( )に入れ、参考の為此の期間に調べた方名のうち同島で一般に使用されているものをローマ字で〔 〕の中に付す事にした。

なおこの記録を書くにあたり、同定して戴いた初島住彦先生、迫静男先生に厚く御礼申し上げます。



## 羊齒植物

ウラボシ科：ホウライシダ，オオイワヒトデ，ホンダ，オニヤブソテツ，アラゲヒメワラビ（ビヤースパンタ），リュウキユウマメズタ，イシカグマ，タマシダ，ホコシダ，シマハチジョウシダ，リュウキユウイノモトソウ，モエジマシダ，ウスバシダ（ビヤースパンタ）  
ナチシケンダ，ホラシノブ（ビヤースパンタ）

ミズワラビ科：ミズワラビ（菅原池）

ウラボシ科：コシダ（ビヤースパンタ）

カニクサ科：テリハカニクサ〔shidakazira〕

デンジソウ科：ナンゴクデンジソウ

ヒカゲノカズラ科：ミズスギ

## 裸子植物

ソテツ科：ソテツ〔shichichi〕

イヌマキ科：イヌマキ科〔shāgi〕

マツ科：リュウキユウマツ〔machigi〕

## 被子植物

### 双子葉植物

#### （離弁花類）

コシヨウ科：サタソウ，フウトウカズラ〔pōsōkazira〕

クワ科：カジノキ，ケイヌビワ，アコウ〔usuku〕，ハマイヌビワ〔shichapaga〕，オオイタビ〔shishichabi〕，ガジユマル〔gazimaru〕

イラクサ科：カラムシ〔mōrupa〕，ヤンバルツルマオ

ビヤクダン科：カナビキソウ（大金久）

ウマノスズクサ科：リュウキユウウマノスズクサ

タデ科：ツルソバ，シマヒメタデ〔tadi〕，イヌタデ〔tadi〕，クダデ〔tadi〕，ヒメミチヤナギ（朝戸），ギシギシ〔kōpiru〕

アカザ科：カワラアカザ〔mamingusa〕

ヒユ科：ハチジョウイノコズチ，ケイノコズチ，モンバイノコズチ，ツルノゲイトウ〔tēnya〕

アオゲイトウ，アオビユ，ノゲイトウ（古里），イソフサギ，イヌビユ

オンロイバナ科：ナハカノコソウ（城），オオクサボク（那間，シルカアブ入口）；トゲカズラ（メーグチバンダ）

ザクロソウ科：ミルスベリヒユ（シナバ），ツルナ（ハミゴー）

スベリヒユ科：スベリヒユ

ナデシコ科：ノミノツツリ（大金久），ウシハコベ，ノミノフスマ（大金久）

ウマノアシガタ科：リュウキユウボタンズル，シマキツネノボタン

- ツツラフジ科：ミヤコジマツツラフジ，アオツツラフジ
- クスノキ科：スナズル〔nīnashikazira〕，ヤブニタケイ〔hiraragi〕，ハマビワ〔pō-chi〕
- ハスノハギリ科：ハスノハギリ（前浜）
- ケン科：キケマン，シマキケマン
- フウチヨウソウ科：ギヨボク〔amagi〕（朝戸）
- アブラナ科：マメグンバイナズナ，ヤンバルガラシ（大金久）
- ベンケイソウ科：セイロンベンケイ〔dunbuigusa〕，リュウキユウベンケイ（メーグチパンタ），シママンネングサ，タイトゴメ（大金久）
- トベラ科：トベラ〔tubira〕
- バラ科：テンノウメ〔ishupamagi or ishimatsu〕，シャリンバイ〔tyāchi〕，テリハノイバラ〔pēnigi〕，リュウキユウバライチゴ，ナワシロイチゴ，ホウロウイチゴ〔ichunbi〕，ヘビイチゴ
- マメ科：クサネム，ナンテンカズラ，ハマナタマメ，シノキカズラ，シバハギ（ビヤースパンタ），ハイマキエハギ（朝戸），ハギカズラ（ビヤースパンタ），ナハエボシグサ（前浜），メドハギ，シロバナミヤコグサ（供利），シマエンジュ（シナバ），コメツブウマゴヤシ，シナガワハギ（城），ハマセンナ（大金久），クロヨナ（前浜），タイワックス，タンキリマメ，イソフジ（ハキピナ），クソエンドウ，カラスノエンドウ〔iramami〕，スズメノエンドウ，カスマグサ，ハマササゲ，ホソミノエビスグサ，タイワンコマツナギ（那間），ハブソウ
- カタバミ科：カタバミ，ムラサキカタバミ〔yahatasō〕
- ミカン科：アワダン，ゲツキツ〔gingichi〕，サルカケミカン〔sāraki〕
- センダン科：センダン〔shindangi〕
- ヒメハギ科：ヒメハギ（大塞山）
- タカトウダイ科：エノキグサ，アカギ〔akagi〕，オウシマコバンノキ，グミモドキ〔kanchanī〕，ツゲモドキ（大金久），ハマダイゲキ，シマニシキノウ，イワダイゲキ〔unmachigi〕
- ハイニシキノウ，ミヤコジマニシキノウ（古里），カンコノキ〔āgima〕，コミカンソウ，アカメガシワ，ヒトツバハギ，コウトウヤマヒハツ，アミガサギリ（ビヤースパンタ），クスノハガシワ
- ウルシ科：ハゼ〔kōshigī or hazigī〕（ビヤースパンタ）
- ツルウメモドキ科：マサキ〔yachiku〕，ハリツルマサキ
- カエデ科：クスノハカエデ（茶花）
- ムクロジ科：コフウセンカズラ（朝戸）
- クロウメモドキ科：ヒメクマヤナギ〔makkō〕，クROIゲ〔ashikuta〕
- ブドウ科：ミツバピンボウカズラ（朝戸），エビズル（朝戸），ノブドウ〔yamabudō〕
- シナノキ科：トガリバツナソ
- アオイ科：リュウキユウトロロアオイ，オオハマボウ〔yūnya〕，ハイキンゴジカ，オオバボンテンカ，エノキアオイ（朝戸）

ツバキ科：ハマヒサカキ〔gima〕

オトギリソウ科：フクギ〔pukugi〕（栽又帰化），オトギリソウ（大峯山）

ミゾハコベ科：シマバラソウ，ミゾハコベ

スミレ科：タイワンコスミレ〔sumire〕

グミ科：ツルグミ〔kūbi〕（朝戸）

ミソハギ科：ミズガンビ，キカシグサ

フトモモ科：バンジロウ〔banshirui〕（栽又帰化）

ノボタン科：ノボタン（ビヤールパンタ）

アカバナ科：キダチキンバイ，ウスゲチヨウジタデ（那間）

セリ科：ハマウド（那間），ツボクサ，ノチドメ（朝戸），セリ（朝戸），ポタンボウフウ，ヤブジ  
ラミ，マツバゼリ，ハマボウフウ〔pamadēkuni or pamagi〕，ミツバゼリ（朝戸）  
（合弁花類）

ヤブコウジ科：モクダチバナ〔achiku〕，シマイズセンリョウ（ビヤールパンタ）

サクラソウ科：ルリハコベ〔mimizinkusa〕，リュウキユウコザクラ（大金久），コナスビ  
（ビヤールパンタ），ハマボツス，モロコシソウ

イソマツ科：イソマツ，キバナイソマツ（前浜）

アカテツ科：アカテツ

カキ科：リュウキユウコクタン（メーグチパンタ），リュウキユウガキ（メーグチパンタ）

モクセイ科：オキナワソケイ（メーグチパンタ），ネズミモチ〔ungazimaru〕

キョウチクトウ科：ミフクラギ，ホウライカガミ，リュウキユウテイカカズラ

ガガイモ科：トウワタ，サクララン〔ōnuzinumainuguimunu〕，ソメモノカズラ，ツル  
モウリンカ

ヒルガオ科：アオイゴケ，ソコベニヒルガオ，グンバイヒルガオ〔pamakazira〕，アツバ  
アサガオ（大金久），ノアサガオ

ムラサキ科：ハナイバナ（朝戸），フクマンギ〔mamangi〕，シマスナビキソウ（那間海岸）  
モンバナキ〔shupunupā〕，カキバチンヤノキ（古里），キユウリグサ，チンヤノキ  
〔shichanuki〕

クマツヅラ科：オオムラサキシキブ，イボタクサギ〔pamaishugi〕，アマクサギ〔kusa  
gi〕，イワダレソウ，タイワン<sup>オ</sup>オクサギ〔tukunachi〕，クマツヅラ，ハマゴウ  
〔hōbushi〕，ミツバハマゴウ〔hōbushi〕

ソソ科：ブソロイバナ，ヤンバルククルマバナ，コナミキ，リュウキユウクルマバナ，コニガクサ

ナス科：クコ（朝戸），メジロホウズキ，キンギンナスビ〔munumuchōchin〕，ヤンバル  
ナスビ〔mununutabaku〕

ゴマノハグサ科：アブノメ，スズメノトウガラシ，シマウリクサ，イヌノフグリ，アゼナ，カワ  
ジサ（那間）

ハマウツボ科：ナンバンギセル

タヌキモ科：タヌキモ（菅原池）

キツネノマゴ科：ツノツクバネ（メーグチバンタ），キツネノヒマゴ

オオバコ科：オオバコ〔pipankusa〕

アカネ科：リュウキユウツバムグラ，ヤエムグラ（大金久），ソナレムグラ，ケニオイグサ，

ハマヘクソカズラ，シラタマカズラ（ハニブ），マルミボチヨウジ

スイカズラ科：ソクス〔tozi〕，サンゴジュ〔mishigi〕

ウリ科：クロミノオキナワスズメウリ（茶花），ケカラスウリ

キキョウ科：ヒナギキョウ（ビヤースバンタ）

クサトベラ科：クサトベラ

キク科：ヨモギ〔puchi〕，インドヨメナ〔yumina〕，オトコヨモギ，シロバナセンダン

グサ，トキンソウ，ベニバナボロギク，ホソバワダン〔hinzyāna〕，ブクリユウサイ，

ウスベニニガナ，タカサブノウ，ウシノタケダグサ，アレンチノギク，ツワブキ〔yamabu

ki or chichaba〕，テンニンギク，ハハコグサ（朝戸），チチコグサ（ビヤースバ

ンタ），キツネアザミ，ハマニガナ，ノニガナ，アキノノゲシ，ツクシメナモミ，ハルノ

ゲシ〔tuiyu〕，キダチハマグルマ，ハマグルマ，オナモミ，オニタヒラコ，クマノギク，

モクビヤツコウ，アキノキリンソウ，サケバコウゾリナ，カツコアザミ，シマフジバカマ

### 単子葉植物

タコノキ科：アダン〔adan or adani〕

イネ科：コブナグサ，ダンテク〔dēgu〕，ホウライテク〔shimadai〕，オキナワミチシバ（叶

ギョウギシバ〔pēnōdaki〕，タツノツメガヤ（東区），メイシバ〔gāginya〕，アラゲメ

イシバ〔gāginya〕，ヘンリーメイシバ〔gāginya〕，アキメイシバ〔gāginya〕，ワ

セビエ，タビエ〔yumuduimai〕，オイジワ，イトスズメガヤ（城），チガヤ〔mahyā〕，ハナ

カモノハシ，イトアゼガヤ，ハチジヨウススキ〔gishiki〕，イトススキ〔yamagishiki，

munugishiki or gyāmutu〕，エダウチチヂミザサ，ハイキビ〔nōdaki〕，スズ

メノコビエ，リュウキユウテク〔yamagundai〕，スズメノカタヒラ，ハイノメリ（大峯山）

ハマエノコロ，ツキイゲ（大金久），フタシベネズミノオ〔inyabiki〕，クロイワザサ，

ザラツキエノコロ，ニクキビモドキ，コオニシバ，コウライシバ〔inyugi〕，ノキビ（東

区），ホテイテク〔karatai〕（栽又帰化）

カヤツリグサ科：コゴメスゲ〔hōbushi〕，ハマアオスゲ，コウボウシバ，アイダクグ，クグ

ガヤツリ〔hōbushi〕，タマガヤツリ，イガガヤツリ，ハマスゲ〔pamahōbushi〕，

ミズハナビ，ハリイ，マツバイ，クグテンツキ，ヒデリコ，ヤリハリイ

サトイモ科：クワズイモ〔huigō〕，リュウキユウハンゲ

クマダササ科：アサギクサ

ホシクサ科：ホシクサ

ツユクサ科：シマイボクサ，マルバツユクサ，シマツユクサ〔chikinkusa〕

ミズアオイ科：コナギ

ユリ科：ソクシンラン（ビヤーマパンタ），クサスギカズラ，キキヨウラン，ノカンゾウ，ヤブ  
ラン，ツルボ〔uppu〕，サツマサンキライ〔sankyā〕，ノシラン（ビヤーマパンタ）

ヒガンバナ科：ハマオモト〔hamayū〕，サフランモドキ〔gusukubiru〕，リュウゼツラン  
〔tonbian〕

ヤマノイモ科：キールンヤマノイモ

アヤメ科：グラジオラス〔yaginkusu bana〕

シヨウガ科：ゲツトウ〔sannin or yamagōta〕

ラン科：オキナワチドリ

以上今までに採集したものは合計93科351種である。

これらの植物のうち分布上注意すべきものとしては、本島を北限となしているものにアワダン、リュウキユウベンケイソウ、ナハカノコソウ、トゲカズラ、シマバラソウ、ヨウトウヤマヒハツ、オキナワミチシバなどがある。

（農学部林学科 3年）

## トカラの昆虫

### トカラ蝶類調査隊

1964年7月13日～30日、生研の会員、田中 章・嶋 洪・大我俊輔  
上宮健吉の4名は、トカラ列島、宝島及び中之島で蝶類の採集、調査を行つた  
名目は蝶類調査であつたが、甲虫、蛾、小動物、陸産貝等も採集してきた。

現在、整理中で、のち本誌とSATSUMAに別けて発表される予定です。

---

## 編 集 後 記

---

桜島の悠然たる姿を前にしては、編集員の心臓、餘裕過剰きみとなり、例によつて、例のごとく、遅れて発行する事に成りました。

編集に際して、山根先生にあられては、御多忙中にもかかわらず快よく御寄稿いただき、又、田中洋氏からは、たびたび助言をいただき深く感謝するものです。

本号においては新人の進出が大分みられましたが、来号では、なお一層活躍され、LEBENの発展を期待するものです。

編集子

---

LEBEN 第7号

鹿児島大学生物研究会会誌

発行日：1965年3月31日

編 集：大我俊輔・上宮健吉・中田一章

印 刷：鹿児島市山下町75

明るい窓社 TEL ② 8335

鹿児島市上荒田町鹿児島大学学友会内